RIKKYO MOVE
More Valuable Education
立教大学　大学教育開発・支援センター
Newsletter
Center for Development and Support of Higher Education
24

開催報告

春学期FDワークショップ

「100分授業デザインの実践 ―大教室でのアクティブラーニング―」

［2019年6月26日］

今年度4月からの授業時間変更を機に、大人数授業におけるアクティブラーニング（以下、AL）に関する理解を深めることを目的として、池袋キャンパスでFDワークショップを開催しました。講師に吉田塁氏（東京大学 大学総合教育研究センター・特任講師）をお迎えし、大人数の授業であってもALが効果的に実践できることを、運営上のポイントとともに学びました。

はじめに、スマートフォン等のモバイル端末を用いてリアルタイムに参加者の質問を共有できるWebサービスについて説明がありました。ICT技術を活用したAL手法の1つとして紹介され、本ワークショップの中でも随時利用されました。また、大教室でも学生どうしでペアを円滑に組む際の指示出しのポイントが吉田氏より教示され、ランダムに座った参加者どうしで実際にペア（2～3人）を組んでその工夫を体感しました。

ペアワークの様子

ALの効果やその定義についてお話があった後、ALの方法をご紹介いただきました。大事なこととして、授業の目的・目標を明確にして、適切な手法を用いることが強調されました。手法例の紹介にあたっては、実践例の問題点と改善策を考えたり、実際にPeer Instructionという手法を体験しながらグループで課題に取り組んだり、ジグソー法を用いる場合の注意点を考えたりする時間がとられ、理解を深めながら進められました。具体的手法のお話の後には、AL手法導入時の注意点が再度指摘され、どのような場合に何を行えばよいか、指示出しをどのようにすればよいかを考える大切さが伝えられました。

吉田 塁氏

最後に、参加者が自身の授業におけるALの活用を検討する時間が設けられ、1人で考えた後、ペアで共有しました。考える活動に取り組む参加者の集中が切れないまま、100分があっという間に過ぎて終了を迎えました。

20名の本学教職員が参加し、参加者アンケートでは「ワークショップそのものが学びの深い授業のお手本でしたので、思い返しながら自分の授業に応用したい」など、好評をいただきました。「方法と目標の関係がよくわかった」といった授業運営のポイントに関する感想、また、紹介された各種の具体的な手法を挙げ、ご自身の授業においてそれぞれの目的に合わせて用いたいという声が多く寄せられています。

グループワークの様子

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教　山路 茜

お知らせ　100分授業に関するFDコンテンツのご紹介〈本学教職員向け〉

- 2019年度開催FDワークショップ「100分授業デザインの実践―大教室でのアクティブラーニング―」
- 2018年度開催FD講演会「100分授業をデザインする―先行大学の事例を手がかりに―」
- 2018年度刊行「100分授業のデザインガイド」

ページはこちら ➡ https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/SitePages/index.aspx （SPIRIT ▸当センターHP ▸「取り組み・刊行物」）

学生座談会

“100分授業”は学生にとってどのような意味を持つのか？

本学では、2019年度より授業時間が90分から100分に変更されました。学生はこの変化をどのように受け止めているのでしょうか。学生が「夢中になれる」、「集中力が続く」授業とはいかなる授業か――昨年度まで90分授業を経験してきた3年生、5名に参加いただき、“100分授業”に関する意見交換を行う座談会を6月13日に池袋キャンパスで開催しました。

参加学生

文学部史学科3年　大野夏奈恵 さん
経済学部経済政策学科3年　佐野　知世 さん
理学部化学科3年　畠山　元気 さん
法学部法学科3年　青木　宏祐 さん
現代心理学部映像身体学科3年　今井　春花 さん

―100分授業になって率直に思ったこと、感じたことは？

青木：100分授業になると聞いたとき「5限終わるの遅っ」って（笑）。授業時間が延びたことよりも始まる時間が早くなったことと5限の終わる時間が40分遅くなったことが一番大きいです。皆さんはどうですか？

今井：私は10分しか延びてないはずなのに授業がものすごく長く感じて「まだ終わらないんだ」と思うことが多いです。アルバイトやサークルの開始時間も遅くなってまだ生活リズムに慣れていないですが、少しずつ朝型のリズムにはなりかけていますね。

畠山：僕も二人と同じ意見です。個人的には「1、2年でたくさん単位取っておいて良かった」と思いましたね。けど、100分授業になった利点もあって、理学部化学科では学生実験が3～5限までノンストップであって、自分のタイミングで休憩がとれるんですね。時間のかかる実験が遅くまでできると、週をまたがずに一区切りできるのでいいと思います。

あとは、朝が早くなったからか生活リズムが変わってきて、夜も少し早く寝ようと思いますね。

大野：私は100分授業になって授業によっては従来より深い学びができるようになったと感じていますが、10分延びただけなのに午後の授業になればなるほど途中で集中力が落ちてしまうと感じました。佐野さんはいかがですか？

佐野：そうですね。経済学部では授業でコメントペーパーを書くことが多いんですが、これまでは急いで書いてすぐに出してしまうことがあったんですけど、100分授業になってからは少し考えてからまとめて書く余裕が持てたのはいいことかなと思っています。あとは大野さんと同じですが、やはり集中力が最後までは続かない感じですね。

佐野 知世さん

―実際に春学期に履修して「夢中になれた」、「集中力が続いた」100分授業はありますか？

青木：法学部では、合間に少し休憩を挟んでくれる授業があります。おかげで、眠たくてどうしても集中できない時も外の空気を吸いに行ったり、どら焼きなど糖分補給ができるものを食べたりできてとてもありがたいです。春学期に履修している半数以上の授業で休憩があって良い工夫だと思います。

佐野：私も経済学部で一旦「自由に話していいよ」という感じで休憩を挟む授業を受けたことがあります。実際に一度休憩すると、また集中し直せると感じました。

大野：私も文学部で休憩がある授業を受けたことがあるので共感します。

今井さんもそういう授業を受けたことがありますか?

今井 春花さん

今井:ないです。休憩があるといいですね。特に映像身体学科では映画鑑賞の授業が多くて、100分すべて映画鑑賞に使うこともあるんです。それではなかなか集中力が続かないし、あまり興味が湧かないんですけど…。面白いと思った授業では、映画の特徴的なシーンだけを20分程度に区切って見せてくれて興味がそそられました。20分鑑賞して解説を聞いて、またシーンが飛んで20分鑑賞すると、次が気になるので100分があっという間に感じましたね。

畠山:映像身体学科、面白そうですね。僕は理学部で休憩のある授業を聞いたことがないので本当にうらやましいです。特に、化学科の場合、専門分野のことが純粋に好きじゃないと「夢中になれる」授業は少ないかもしれないです。

「夢中にさせられた」、「集中させられた」授業について話すと、理系科目は授業中に演習を取り入れることが多いんですが、内容を覚えるだけでなく、そこから手を動かして問題を解くとか、研究に当てはめて初めて知識になります。従来の90分授業では足りなかった演習時間が100分授業では延びて学生が「夢中にさせられる」流れはできてきました。

それから、小テストの時間も延びたので、考える時間は以前より増えましたね。具体的には、90分授業では15〜20分位だったのが、100分授業では30分位とれる回も増えてきましたね。けど、いずれの授業も休憩はないですが(笑)。

今井:夢中にさせられる。

畠山:そう、「夢中にさせられる」っていう感じです。
他の学部では、演習のような時間は増えましたか。

佐野:そうですね。経済学部では、もともと授業中に問題を解く等の機会は少ないんですが、演習にコメントペーパーが入るのだとしたら考える時間も回数も増えたかなと。大野さんはどうですか。

大野:文学部では課題文献やグループワークがあって、それを自宅や各班で行って、次の授業に持ってきて自分たちの意見を出し合う形が多いのですが、そういう時間は増えましたね。

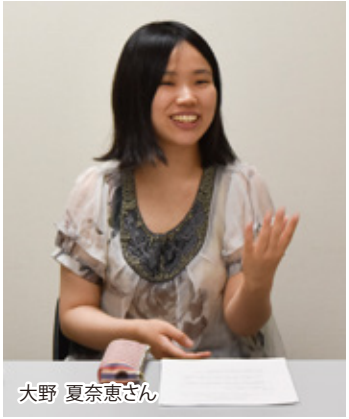
佐野:夢中になれるというか、集中力が最後まで続くと思ったのは、配布資料がない板書形式の授業です。手を動かしていたらすごく集中が続くと感じました。授業内容がすべて記載してあるレジュメだと目で追うだけになるので、少し眠くなりがちかなと思います。

青木:夢中にならざるを得ない、集中せざるを得ない授業ってありますよね。レジュメと対応していないことを話す先生の授業では、何をしたらいいのか分からなくなることもあれば、逆に聞いていないとテストが解けないと思うと、ひたすら紙が真っ黒になるまでメモ取ったりして。全員が当てはまるわけじゃないと思うのですが。

大野:確かに。私の中で夢中になれるのはゼミの授業です。ゼミ生みんなで顔を合わせながら円になるんです。基本的にペアワークから全体で意見を出し合ったあと、先生がサポートしてくれます。好きな授業というのもありますが、学生一人一人考えることができるので眠くならないし、すぐにゼミの時間が終わっちゃうんですよ。大教室だとなかなか難しいと思うんですけど、チョーク&トークになっている授業は眠くなったり、集中力が持たなかったりという印象がありますね。

畠山:やはり100分授業になると、時間が増えるから教員が一方的に話すというよりも教員と学生とのやりとりの時間が増えるじゃないですか。そうすると他の学生の意見も聞けると思うんですが、学生どうしやクラス全体の意見が聞ける授業はありますか?

大野:私はクラス全体の意見が反映された授業はあまり体験したことがないですね。先生がコメントペーパーに対して次の授業の冒頭10分位で回答することはあります。特に史学科は大人数講義が多いので、そのあとは講義形式ですね。少人数の講義だと「○○さん、どう思う?」みたいに割と話せるんですけど。200人規模の学生相手となると一人一人に目がいかないですし、コメントペーパー上だけのやり取りになるのかなって。


大野 夏奈恵さん

授業終わりに先生の所に行って質問することはあるんですけど、次の授業もあるので2〜3人が限界じゃないですか。それもあって「夢中になれる」、「集中力が続く」となると少人数講義になっちゃうんですよね。

佐野:実際に学生どうしで話し合う時間はなかなかないですね。ある授業では前回の最後に集めたコメントペーパーに対して、次の授業の冒頭で先生が良い意見や鋭い視点などを抜粋して紹介することがあるんですけど。

今井:前回のコメントペーパーから先生がピックアップして次の授業の冒頭30分位で説明や回答してくれる授業があります。ですが、私はその興味や関心がかきたてられたとき、リアルタイムで先生に質問できるとその場で疑問が解消されるし、面白いと思うんですよね。「今から質問タイムにします」みたいに。

畠山：少し理学部特有の観点ですが、難しい式だと分からない部分を発見するのに時間がかかってしまうことがあるんです。その点で、理学部ではその場で反映というより、コメントペーパーは「あり」かと。でも、その場で友達に聞くとか、先生に質問しやすい環境を作るのも大事だと思いますね。

それと化学科では、例えば「この物質何からできてるの？」とか、日常とかけ離れた内容が多いので興味がない人はどんどんつまらなくなるんです。けれど、ある先生が現実世界で二硫化モリブデン（MoS_2）がどのように活かされているか具体例を示してくれたとき、すごく引き込まれましたね。100分授業になったことで、そういった時間が増えたのでいいと思います。

畠山 元気さん

あと、化学科は物質の構造や反応を自分の力で一から最後まで説明しないといけないんですね。記述問題を出してくれると、その力が付いて深い理解につながるので夢中になります。穴埋め問題とは違って記述は時間がかかるので100分授業の利点ですね。

青木：全然違う角度から意見が聞けてすごく面白いです。

あと、法学部の大人数教室で「Clica」というアプリを使ってアクティブラーニングを進めている授業があります。アプリには1～5の選択肢とコメントを送る欄があって、スクリーンに常に投票結果が出ます。先生から「今から少し〇〇について作業をしてコメントで送ってください」と学生に送ると、先生だけじゃなく、周りの学生の意見を聞くことができます。ゼミは別ですが、法学部では大講義室で聞くだけの授業がとても多いんですが、アプリを使うことで退屈せず、いろんな方向から学ぶことができました。自分も意見を発信できたし「自分と同じ学年にこんな優秀なコメントする人がいるんだ、もっと頑張らなきゃな」とすごく刺激になりますし、その授業時間はあっという間に終わります。常にお題を出してくれて、自分で調べながら授業が進行していくと眠くならないですね。

他の学部では授業中に発言したり、周りとコミュニケーションを取ったりできる大人数授業はありますか。

今井：アプリを使ってコメントできると面白いですね。自分も発言できるし、取り入れてほしいです。私の知る限りでは映像身体学科でアプリを使っている授業はなさそうです。先生が学生に質問するとしても教室の前列に話し掛けてマイクを通さずに会話が進むことがあって。授業の話題から置いていかれると集中力もなくなってしまいます。

大野：今、私もアプリを使った授業の話を初めて聞きました。これまで履修した授業が該当しないだけかもしれないですが、文学部の特性上そういう授業がしにくいんですかね。少し似たものでは、コメントペーパーではなく、コメントをデータで送る授業がありましたね。

佐野：経済学部でも同じようにアプリを使って学生番号でログインする授業があったのですが、使いにくいという意見が多くて1回でなくなったんです。Wi-Fiが繋がらなかったり、ログインできなかったり、違う場所からログインできたりと不正につながりかねない問題点もあったみたいです。

畠山：学生が授業に夢中になったり、集中したりするためのアプリだと思うのですが、実際は授業自体に夢中にはなれてないという感じでしたか。

佐野：すべてのコメントがアプリに流れてくるので「携帯を見ていて集中できなくなった」、「授業を聞きたいけどコメントを見てないといけない」とか目的と逆の意見もあがったみたいで。アプリの仕様や使い方にも課題があったみたいです。

青木：なるほど。アプリを出席代わりとして使うのではなく、授業をより良くしていく1つのツールとして使うのはすごくいいのかなって思います。

―「夢中になれた」、「集中力が続いた」従来授業の取り組みは？

大野：私は写真や映像で示してくれる授業だと集中力の保持につながるのかなと思います。文面と実際の映像を見て分かることや感じることは違うと思うんですね。歴史上の写真や映像を2～3分でいいので示してもらえると雰囲気がつかみやすいし、引き込まれるのかなと。視覚情報から新たに得られる学びもあるし、単純ですけれど、先生の言葉だけじゃなくBGMが流れてくると身体的な面でも刺激になって集中力の保持につながるんじゃないかと思いました。皆さんはどうですか。

佐野：今まで集中力が保てたなという授業は、共通して「分かりやすい」というのがありました。例えば、「経営学１・２」という授業ではレジュメでも1スライドで言いたいことが簡潔にまとまっていて、流れもスムーズで。特に、実在する企業の事例を交ぜながら話してくれる授業は本当に分かりやすくて、最後まで集中できる要素だと思いました。具体的には「実際にこの企業のこの事業では〇〇な取り組みをして〇〇という結果が出た」とか。理論だけじゃなく、データを用いた

実例があると身近に感じられるし、想像もしやすいと感じますね。

大野：なるほど。確かに集中力が続く授業ってわかりやすい授業だったなと思って聞いていました。

青木：確かに。スライドには簡潔な文章だけ書いて、先生はその肉付けを話していく。スライドにもレジュメにも対応しているし、かといって授業に出席しなくて理解できるかというと、そうじゃなくて。常に聞いて集中しないと授業に付いていけないぐらいが眠くはならないし、集中力は保持できるのかなと思います。

あとは、何だろう。自分の好きな内容の授業は夢中にはなれますよね。「法哲学」という、多く問い掛けられる授業があるんです。常に考えさせられる授業だと面白くて1回も休まずにすべて出席しました。法学だけでなく、哲学、生命倫理など、いろんなことにつながる授業だったのと、もともと興味があったから楽しいと感じたところもあると思うんですけど。

青木 宏祐さん

畠山：化学科だと自分から集中するというよりも、演習を解くとか、集中しなきゃいけない環境を作るのが一番なので。レジュメがある授業とない授業があるんですけど、レジュメを見ただけでは理解できない内容もあるんですね。先生が話した言葉をメモするとか、そういう所から、結局強制的に集中させられる環境にはなっていますね。

―学生の学びを深めるために延びた10分をどう活用しますか？本学の教育改善のために提案できることは何か。

佐野：今履修している授業の1つですが、最後の5分、10分を使って簡単に授業内容の復習をしてくれます。これによって次の授業内容の理解がしやすくなるのを感じています。

大野：私は完全に座学で大人数の授業の場合、少しでいいので休憩を1回入れてもらうのと、授業最後のまとめや次回の授業内容に軽く触れてもらうことですね。そうすることで次回の概要がつかめるので、自分でも予習しやすいですし、次回の授業を受ける際に、より深く学ぶことができるかなと思いました。

青木：私も畠山くんが言ったように、具体例等のいろいろな話を増やしてくれるのはすごくいいと思います。延びた10分で授業内容を増やすのではなくて、内容を分散させて先生自身の負担も減らしながら、私たち学生の集中力をどれだけ維持させるのかが大事だと思います。先生も学生が全員起きていて聞いていたほうがいいと考えたとき、1分でいいから「深呼吸してみましょう」、「ストレッチしてみましょう」とか息抜きの時間があるといいんじゃないかと思います。

畠山：今、僕も50分位たったところで少し休憩や深呼吸をする場面を想像したんです。実験中はもちろん休憩はないんですけど、授業内容にすごく入り込んでいるときに「じゃあ休憩です！」と言われると逆に集中が切れるかもしれないと思いました。

青木：もう一回スイッチ入れなきゃいけないんですね。

畠山：そうです。さっきはいいなって思ったんですけど、あまり単純にいいとは言い切れないですね。当然90分授業のほうがいいですが、100分授業になって、より深く学ぶことができるようになったと思っています。延びた10分をどう使ってほしいかというと、次回授業の予告と予習箇所を一言で手短にいただけると嬉しいですね。あとは知識定着や応用のためにも具体例を挙げてくれるといいですね。100分授業の延びた10分は決して余裕が生まれた10分ではなく、最後まで濃いのがみんなの学びのためだと思います。

青木：おお、すごい。あと、いつ眠たくなるか考えると、興味や関心のない内容のとき、既に知っている内容のとき、もしくはその内容が本当に理解できない状態のときだと思うので、そういうのがなくなると自然と学生の集中力は持つのかな。

大野：今の話を聞いて思ったのが、先生の話し方は大事かなと思います。話し方が平坦だと、どこが重点なのか分からないままずっと聞き続けないといけないので、大事なことを伝える前に少し「間」をあけたり、少し大きな声にしてもらったりとか。学生自身がまとめればいい話ですが、あまりにも分からない話題が続くと結局要点がつかめずに授業が終わってしまうので。

今井：あと、何ですかね。映像身体学科では概念を扱うことが多くて、どうしても内容が捉えづらいんですね。だからこそ授業中、先生に対して「私たちを置いていかないでほしい」と思うことがあります。
ある先生は扱う概念についてこれまでの学生はどのように捉えてい

たか、という具体例をいつも話してくれるんですね。そうすると、自分にも重なる部分があったり、人ごととは思えなくなったりして、集中力が上がったんです。延びた10分を使って受講生に話しかけるとか、コミュニケーションを取ってくれると嬉しいです。

青木：100分授業になって、専門分野や先生によって進め方の違いがより明確に出たなと感じています。ただ聞くだけの100分って本当に長いと思います。それをどう短く感じさせるか、あっという間に感じさせるか、先生たちに求められるんじゃないかなと思います。

畠山：僕も100分授業になって時間が長くなった分、先生の色がより濃くなったと感じました。

青木：学生にとって何が大事か考えると、自分の好きなことや興味のあることが学べる授業をシラバスから見つけだすこと。もし、シラバスを充実させることができて学生が自分の好きな、興味のある授業を受講することができたら、より集中した夢中になれる授業になるんじゃないかと思いますね。

座談会まとめ：助教　藤澤 広美

新・副センター長あいさつ

当センターでは今年度4月より、副センター長が交代しました。以下に、新・副センター長からのメッセージをお届けします。

副センター長・TL(Teaching＆Learning)部会長

幡野 弘樹（法学部教授）

2019年4月より副センター長・TL部会長を務めることになりました法学部の幡野です。

実は、センター業務に関わるまでは自分の授業手法の改善をあまり熱心にやっていませんでした。私が学生の頃受けた法学部の授業は、何の工夫もない大教室での一方的な講義でした。それでも、どこの教科書にも書かれていない、深い思索をめぐらせている授業には感動しました。そのような学部時代の経験からか、学生への見せ方にはあまり興味はなく、たくさん勉強をして、その分野の本質を理解し、学生に分かりやすく伝えさえすればいいではないか。そんな風に思っていました。

それでも、TL部会主催のイベントやTL部会の会議に出席することにより、さまざまな先生方が情熱をもって学生の理解を深めるための工夫をなさっていることを知り、大いに刺激を受けました。また、情報交換をしていくなかで「学生の授業評価が高い教員でも、授業改善の努力を怠っていると3年で授業評価が低下する傾向にある」という議論があることも知りました。

こんな私でも最近は、スマホでリアルタイムに学生の質問や意見を受け取るWebサービスを用いながら授業をするようになりました。私自身いまだに授業改善の余地が十分にありますが、皆さんの授業に役立つ情報をセンター員の先生方、助教、事務局にサポートをいただきながら発信できればと思っております。さまざまなイベントに積極的にご参加いただけると大変嬉しいです。

編集後記

今号では、“100分授業”をテーマとした学生座談会の様子を記事にまとめました。多様な学部学科の学生どうしが「夢中になれる」「集中力が続く」授業について語り合うことで専門分野特有の観点が相互に発見され、それぞれ学生の目線から自分たちの学びを深めるための提案がなされました。今後も学生の学びの主体性を高めるための教育改善に資する情報を発信していきたいと存じます。

（藤澤）

「MOVE 第24号」
立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2019年9月25日発行
発行　立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel：03-3985-4623　Fax：03-3985-4615
E-mail：cdshe@rikkyo.ac.jp
https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html